

北白川日誌

北白川日誌

岡部伊都子

新潮社版



きたしらかわにつし
北白川日誌

昭和四十九年七月十日 印刷
昭和四十九年七月十五日 発行

定価 七〇〇円

著者 岡部伊都子おかべいづこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒152 東京都新宿区矢来町七一

電話東京 (三三) 三六二一 業務部
(三三) 三六一五 編集部

振替 東京 八〇 八番

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

北
白
川
日
誌
・
目
次

夢	卅	七
山越え	二三	三
友禅板	五	完
念	五	
雛の宿	七	二
女人舞楽	七	公
還り来迎	一〇三	

氷室の里……………一九

業平母塔……………二五

石敢当……………二五

約……………二七

ハーンの妻……………二八

あとがき……………二〇〇

北
白
川
日
誌

夢

卍

ものを見るのは目だ。

だが、眠っていて、ありありとものの姿や動きを見るのはなにによってか。無意識下の自分にめぐりあう夢の映像。自分が人間という生きもの、女の身と生まれてきたことへのふしぎと同じに、なにもかもが、あらためてふしぎに思われる。

眠る。眠ることで全心身を休息させ、やがて目がさめるといふしくみも、思えば思うほどふしぎだ。眠っているはずの意識が働いてはつきりとした形や筋を見る。しかも夢で、次におこることが予見される場合がある。

夢を見るといふこと自体、疲れである。充分眠っている状態ではないからか、夢ばかりみていた朝は気分が冴えない。とくに気にかかることがあると、幾度も同じ夢を見て目をさます。夢にまで心を刺されて苦しく、夢責めの感をもつことさえある。

それなのに、夢ということには、なんとなく甘やかな情感がよりそうている。理想、天上界、希望、期待、未来といった内容がふくまれている。瞬時にして醒めるまぼろし。見ようとして見えず、見まいとしても見えるまぼろし。目ざめてしまえばまことにあつけないまぼろしではあるが、それを見たことはたしかだ。

夢を見る。夢を抱く。夢を創る。夢を描く。夢を夢みる。

まるで、はかない水泡か、空にわたる虹である。手にとれるものではない。が、決して非現実なるものではない。考えてみればわたしたちの人生そのものが仮の世であり、夢の世だ。夢の世に見る夢は、いかにも重い実存のもの。われとわが自覚の及ばぬ深層の心のひだが、ふと形となって夢にあらわれることを思えば、目ざめてのちがまことか、夢が真実か、簡単にわがちがたいものがある。

わたしが大好きな自分の夢のひとつは、飛ぶ夢だ。これはいつごろから見はじめたものか。空想好きの子ども心が背に翼をもつて自由に飛ぶことを考えていた。瘦せっぽちで手をうしろにやると背の骨が左右にぐっと盛りあがる。「気味が悪い」と姉たちのいやがるその骨が、翼の退化のあとのように思えた。このごろ何かのコマーシャルで、翼をもった男が飛ぶので

なにか照れくさい。あのような飛びようを考えていた。

だのに、実際に見る夢では、階段を二、三段とぼして敏捷に飛ぶ感じである。足にはずみをつけてぐんぐん昇ってゆく。電柱にさわらないようにしながらまっすぐに上昇し、空中を立ったまま飛ぶのである。夢の中ながら年齢を重ねるにつれてだんだんと上手になってきた。虚空を飛ぶ空気の揺れやからだの浮きぐあいが実感として感じられる。危機を脱するため飛ぶ場合もあったし、目的にいそぐために飛ぶこともあった。また、空中散歩のためにだけ飛んでもいた。

母の夢は数え切れない。娘時代母が元気なのに、坐ったまま雲に吸われてゆく死の夢をみて泣いたこともあったが、いまでは母を求めて探しあぐね、思いがけないところに住んでいる母をみつけている。「生きていてくれてよかった」と涙して目がさめて、もう一度泣く。やはり人に真意をわかってもらえない時や、とんでもない困難にであって苦しむ時に多い。戦争、空襲の夢をようやく見なくなっと思ったたら、このごろは公害の夢を見るようになった。夢判断では「天地暗黒は凶」だそうだが、樺色となった天地の中で死に絶えてゆく人の群の中に自分も死を待っている。近親の死の予告はたびたびまさ夢となった。夢はあまり

に数多くてとうてい書き切れない。

女の夢と、男の夢とはちがう。女は、男ばかりの国に行きたいと願わない。男は女ばかりの国を夢みる。七歳にして腰元の手燭の灯をふき消させた『好色一代男』の世之介の父は、夢介。世之介は三千七百四十二人の女とたわむれ、七百二十五人の少人をもてあそび、六十歳になってからさらに女護ヶ嶋に舟出したとある。夢介の夢をうけつぐ世之介は、男たちの夢想する女護ヶ嶋に渡ろうとする。聞くだけでもうんざりして、このしたたかな生きものである女をそこまで飽かずに求めた世之介にむかって「ご苦労さま」とねぎらいたくなる。

世之介は難波の江の小嶋でつくらせた新しい舟に好色丸と名づけ、吉野太夫の使った緋縮緬を吹貫にしてひるがえし、女郎たちのきものを継ぎ合わせた幔幕をかけならべた。

「生舟いけふねに鯨どじやうをはなち、牛房ごばう・薯蕷やまのいも・卵をいけさせ、櫓床の下には地黄丸五十壺、女喜丹なまこち、式十箱、りんの玉三百五十、阿蘭陀糸七千すぢ、生海鼠輪なまこち六百懸、水牛の姿二千五百、錫の姿三千五百、革の姿八百、枕絵式百札、伊勢物がたり式百部、犢鼻褌ふんどし百筋、のべ鼻紙九百丸、まだ忘れたと丁字の油式百樽、山椒葉を四百袋、ゑのこづちの根を千本、水銀・綿実・唐がらしの粉、牛膠どじやう百斤……云々」



水面に夢を描く落葉落花

強精剤、催淫剤、墮胎薬その他、本卦^{ほんけ}帰りの身におそろしいほどの荷を積みこんで、同じような男たち六人と恋風に任せて舟出する。「抓^{つか}どりの女遊び」をしようという女護ヶ嶋はどこに設定されているのか。伊豆の国からの舟出といえ、黒潮通う南島のひとつにちがいない。天和二年（一六八二）井原西鶴がこの世之介を書いた時代はもとより鎖国の掟。国禁を犯してあの世までもと女護ヶ嶋に舟出する好色男。か細くにやけた男では、ここまでの精力と胆力はあるまい。

想像上の境界として、女護ヶ嶋はさまざまに考えられているが、沖縄本島からさらに南西に遠くへだたっている宮古島に、女護ヶ嶋伝説があった。『宮古島庶民史』（稲村賢敷著）には、昔与那島^{よなしま}といったという大女島（女ばかりの部落）の話が収められている。

大女島の女たちは三月になるとご馳走をつくって野原に出、三日三晩踊ったり歌ったりして遊んだ。野宿をする「風のとみ」といって妊娠した。風媒花のごとき風媒女、神女たちである。自足して生んだ子は女兒が多かった。男の子が生まれると種変り者^{しゅへんりしや}といって弄び殺したから、いつも女の子だけが育った。

この女護ヶ嶋に、「たかもていっちゃ」という怪力の者があらわれ、彼女たちが崇敬する